

寺田寅彦全集

第十四卷

寺田寅彦全集 第14巻 (全17巻)

1961年11月7日 第1刷発行 ©
1979年2月14日 第7刷発行

¥ 800

著 者 寺 田 寅 彦
発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日
記
二

目次

大正九年	五
大正十年	二一
大正十一年	三三
大正十二年	四七
大正十三年	六二
大正十四年	六九
大正十五年	七三
昭和二年	七九
昭和三年	八六

昭和五年	八九
昭和六年	九六
昭和七年	一〇六
昭和八年	一二四
昭和九年	一三七
昭和十年	一六四
注解	一七五
後記	二〇一

大正九年

一月一日 木 晴 例によって故先生の話が出た。

野上君の事を瓢箪ひょうたんという由。「瓢箪にふられて帰る糸瓜へちまかな」という句のいわれを聞く。森田草平、○○○○にあばれ込まれる話。小宮君は四日に出発して月末に帰る由、帰ったら春日かすがへ飯を食いにっこう。

秘結で困る。座薬を用いる。

学生の吉岡君が「最少自乗法」の起稿の相談に来る。田丸先生がよこしたのだ。

ことはもうかまわず年来の不平をドシドシ爆発させてやろう。失敬なやつらを片はしから退治するのだぞ。」雑煮はうまかった。

一月二日 金 晴 朝からいやいや年賀状をかいた

が、とうとう腹が固くなってしんに書かせる。「溝淵孝雄たかおさんが年始に来てくれて、何年ぶりに会った。

なんだか自分より若い人のような気がした。フロックのズボンが少し長すぎるのが妙に気になった。」忠雄ただおさんの子供はインフルで元日に入院したそう。うちでも近年ほとんどきまったように元日に子供が病気になるが、ことはだれもたいした事はない。」東一とういちと正二せいじ、中城なかしよの新寓しんゆうへ行く。

一月三日 土 晴 朝から不愉快でたまらない。病

気ははっきりしなくても十日過ぎれば学校へ出なければならぬ。学校の人々で自分の病氣などほんとうに心配してくれる人もありそうもない。虚偽で非人間的な学校勤めもつくづくいやになった。母上に相談して

もう学校をやめてしまおうと思うと言ったら、母上はそれがいいだろうと言った。なんだか母が急にエラク思われた。午後、北川潔氏が来て、帰りに喘息の発作を起こして例の煙草を吸った。夕方、田丸先生が来たから、イキナリ学校をやめる事を話した。先生は病気がよくなってからよく考えたらいいだろうと言った。

学校をやめれば生活は苦しくなる。しかしいつまでも重箱の中に押し詰められて、楊枝でつつかれるような生活をするのもつくづくいやになってしまった。貧乏してもいいから自由なからだになりたい。やめてどうするといふあてはない。子供は何も知らずに愉快に歌ったりカルタを取ったりしている。聞いているとなんだか名状のできぬ心持ちになって来る。

一月四日 日 晴 風 午前、病中の記を書きかけた。どうも何をしてもうすぐいやになる。午後、順が来

た。昼飯をくってゆっくり話し込んだ。北川のおとうさんが頭部に妙な禿ができているのを、聞いてみたら禿頭病だそう。しかし黴菌ではなくて毛髪の栄養不良から起こるのだと言っていた。酒杯の話から、酒ききが用いる茶わんの中に特別な藍の紋があって、酒を透かして見た藍の色からまず鑑定をするという事である。ピペットの検定装置の考案をしてやる。

晩の七時に国沢母堂の遺骨が帰るから、しんを見送りにやる。「リリヌストラシオン」で見ると米国が仏国へ残した港や鉄道の軍用施設はたいしたものである。フランスがこの始末をどうつけるかが見ものである。

一月五日 月 晴 無風 昼前、しんと書齋でいろいろ話をした。午後、久しぶりで絵でもかいてみようと思つて、二階の日向で床の間の蓬萊と菊、南天の花瓶をうつす。うまくできない。それきりでやめて、日

向でねて雑誌を見る。焼き餅三つ食う。夕飯に雪子が歯が痛いと言いだしたので、花に背負わして白山の歯科医へやる。そのごほうびにいるはがるたを買って来る。きょう貞子が画用紙へかいてこしらえたほうははるかにいい。

〔欄外〕 霜がとけて、子供らが芝の上で羽根をつく。

一月六日 火 曇 きのうちから貞子が暮れに買って来た涙香の「鉄仮面」というのを読んでみた。一昔前に一度読んでたいへんおもしろかったが、今よんでみるとたいした好奇心の満足も得られない。ちょうど活動写真のようなものである。読みだせば結局読んでしまふけれども、読んでしまつて何も残らない。「昼過ぎに洋服屋の小林店員が外套の仮縫いをもって来た。応接間へ通してストロープへ点火してやり、居間で洋服を着かえて出て行って見るとストロープに当たっていた

のが急に遠くへ退くけはいがした。よほど寒そうであった。「きょうは少ししぐれまして、なかなかお寒うございます」と言った。三角さんから手紙が来た。にいさんの子供が伊東でインフルになって往復しているそうである。三日、四日の便は(一)だそうである。十日ごろから出ていいか聞いてやる。夕方、年賀はがきを整理する。宿所名簿も整理。

一月七日 水 曇 夜少雨 朝、ねていたら跡が来た。暮れに郷里に電報を打ったのは金を取りよせるのが要旨であったのが、電文不明のために騒いだのであったそうなる。跡は学校をやめて養生する事をヒドク賛成していた。ビールを飲んで帰った。引きちがいに秋山君が来て、義兄の山本氏から「鶴の卵」という菓子をもって来た。理科教育の話をした。書画商の広野と例の古着屋森野が来て、南薰造の油絵を見せた。先日

の軸物と交換せぬかと言うのである。氣にいらぬから断わる。どうでも先日ゆうしゅうの友松、北馬ほくばほか数点を譲れと言うのでとうとう百円でやる。夕方山崎やまざきさんきたり、見舞いにウエーファーをもらう。学生三名つれて志摩へ行ったそうなる。夜、梶山かじやま君が来た。あとでまた蒲地君が来て、十二時過ぎまで日蓮主義にっれんしゆぎの宣伝をやって行った。

一月八日 木 曇 朝、木下君きのしたが来た。柳直勝君やなぎなおかつの晴雨計がだいぶ成効しているそうなる。午後、坂井老人さかいきたる。鶏のあくびの話で皆が笑った。次に酒井老人さかいが御年始ごねんしに来た。栗餠くりまんをもらう。学校から小使せうしが増沢君と柳君の論文の校正をもつて来た。

夕方、友枝君ともえが来た。故松山棟庵まつかやまとうあんの屋敷を買ってこわし、家にして持ってくるそうなる。境界けいがいの塀へいを共同で石垣いしがきにしようという相談をする。書齋しゆざいを見せる。「風

呂ろにはいっていたら中村先生なかむらが来た。十二日ごろから講義こうぎを始めるのはよしたほうがいいと言って、止めに来られたそうである。」

中村先生から大島おおしまみやげの山の薯いもを贈られる。

昨夕森田草平君から送ってくれた「漱石先生と文章道」を読みかけているが、少しよむとすぐに何かと妨げられてなかなかゆるゆるよめない。病気で休んでいるのもなかなか忙しいものだ。

〔欄外〕 患者の内面的状態や内面的生活にまで立ち入った理解をもつて治療を施す医者いしやは今の世にあるかないか疑問である。

一月九日 金 晴 朝、小宮君の手紙が来た。四日に国に帰るのであったが、妻君から子供まで高い熱が出て看護婦もなく、病院もふさがっているので困っているそうである。小宮君のほうほうがけんけんのんに思われる。

午後、貞子は坂井へ年始に行く。自分も車で試みに中西屋まで行く。風がなくて暖かい日光が空にも街路にも満ち渡っている、幌の中は暑いくらいである。駿河台をおりる時、電車線路にまいた水が銀のようにまぶしく光っていた。中西屋で上の「欄外」書物を買って読みながら帰った。帰ってすぐ体温を測ったら七度五五あった。」

昼前、しんと雪子と花が尼子さんでワクチン注射をしてもらった。

森田君に礼状をやろうと思ったが、宿所がわからな
い。学生会名簿を調べたら阿部次郎君があるきりで、
松根、小宮、鈴木、野上、森田、安倍六君とも申し合
わせたように入会していない。

真鍋さんへ手紙を出して、辞職のため相談したいか
ら、時日を知らせてくれと頼んだ。

〔欄外〕 Oscar Wilde, De Profundis 1.10

Maeterlinck, The double garden 1,95

〃 , The Life of the Bee 1,95

5,00

一月十日 土 晴 日記はその日につけなくてはダメなものだ。少なくとも気分のレコードは一夜あけたらもうだめだ。

メーテルリンクの「小犬の死」「偶然の殿堂」「剣の頌」というのを読んでみた。きのう読んだワイルドの「デ・プロファンデイス」のように鋭いところがないがとにかくおもしろいと思った。これなら自分も何か書いてみようかと思った。円地君が玄関まで来たがスグ帰って行った。

夕方から正二が浅草へ曲馬を見に行った。一人では悪いと思って花をつけてやった。十一時半になっても帰らないから心配した。帰りに混雑の中ではぐれてし

まって困っているのではないかというような事を想像して心配していたら、やっと帰って来た。平気なものである。電車が込むから本郷三丁目まであるいて来たそうだと。曲馬の絵ハガキを買って来た。

子供が連れにはぐれてむやみにかけ出す心理を解剖してみた。

午後、小野澄之助君が来て小田原の蒲鉾をもらった。八日に中央気象台の辞令が出た、そしてマグネのほうを引き上げたそうだと。地磁気の起因について何か案があるらしい。

一月十一日 日 晴　きのう津田君からのハガキでは、家主が不承知で画室が建てられなくなったそうだと。返事を出す。「子供らとおばあさんとまち、尼子さんへ注射に行く。」

余語君が死んだという知らせがあった。いつでも顔

色の悪い寒そうな人であった。十年前妹と二人で夏、蚊帳なしで寝ていた。近ごろは西が原へ自分で家を建てたと聞いていたが、気の毒な事である。

午後、藤原君が来た。出した茶の湯げのイリデッセンスを見ておもしろがった。物の影のまわりの半影の外に見える明るい部分の話が出た。あれはイリュージョンだろう。近日新敷地内の官舎へ移るそうだと。「米次郎氏が年始に来た。ちょうど藤原君が来ていたから二階へ通した。」

一月十二日 月 半晴、夜雨　朝、長岡先生へ手紙をかいた。学校をやめる事を許していただきたいというわけを述べて、郵便で出しておいた。

なんだか風邪ごちであるが、体温は五分ぐらいである。足が少しいたい。「雪子が「幼年画報」をかってもらった。国芳の絵の写しが出ているのはかえって新

しい。いったい子供の雑誌があんなにたくさんあって
 みんな千篇一律せんぺんいちりつなものには驚く。もう少しオリジナルで
 いいものができそうなのだ。絵かきも頭がなさすぎ
 る。第一あの色彩はなんだろう。調和もなければ統一
 もない。Mの「未来の予言」*を読む。彼は未来が *desert*
*hinate** だという事を仮定しているようだが自分はそ
 う信じられない。

一月十三日 火 朝曇、後晴、南風強く夜に入り雨、
 すぐ晴れる 朝早くから目がさめていろいろな事を
 考えた。「結果」が「原因」を生むというような事を考
 えた。十一時ごろから電車の音や砲兵工廠はうはいこうじょうでモートル
 を試験するらしい音が非常によく聞こえた。上層に強
 い南風(温度の高い)のあるためだったろう。十二時ご
 ろからはたして強い南風になった。」しんと雪子と正
 二と花は、尼子さんへワクチンの第二回注射に行った。

正二はけさ体温が高いから学校を休ませたのであった。
 午後、津田君が来て、富士八湖の画帖がびょうを見せてくれた。
 自分の天長節にかいた菊の絵を表装させるといって持
 って帰った。東京百景をかくのだといっている。おも
 しろいものができらるだろう。尼子さんが来た。自分の
 熱はやはり肺炎はいせんだろうという事である。そして「だい
 ぶノイラステニーニのようですね」と言った。そうかも
 しれない。」東一は授業が一時間多く、あとで大掃除おほそうじ
 があったそうで六時ごろに帰った。カバンのひもがち
 ぎれて帰った。夜、風が雨戸をあおって軒下につるし
 た物干し竿ざらか何かがカタカタあたる。なんだか心が落
 ちつかないで不愉快である。

一月十四日 水 晴 午前 Maeterlinck の「オリ
 ーブの葉」をよむ。宗教が倒れて科学が起こって、世
 界観は外部から養いを採って新しい道徳義務観が生じ

る事を論じている。彼が科学の本質や価値をよく了解しているには感心させられる。日本の哲学者や文学者にはこんな人はない。」昼前に下啓助氏しもけいすけが来て、水産会懸賞問題審査の事を話して行った。」午後は風がなくて暖かであったから、しんがどこかへ行ったらとすすめた。自分も出たいような気もするが、学校の問題を早く片付けねばならぬと思って田丸先生へ長い手紙をかいた。それから二階で「十九世紀絵画史」を見た。居間の紫檀ししたんの机を二階へ持って行かした。この冬の仕事場にするつもりである。夕飯にきょうも牛肉を食ったが、久しぶりだからなかなかうまかった。」昨夕の便へんを三角さんへ届けた。伊野部いのべへ辞職の事をいうてやる。

一月十五日 木 晴 Maeterlinck の「蜜蜂みつばちの生活」を読み始める。午後、しんはシヨールと束髪たつかみのか

んざしを買いに行く。二階の机で日光に浴しながら漱石書簡集よむ。先生が朝日へ入社前後の手紙が特に興味を引いた。四時ごろ長岡先生が来られた。今辞職というのはあまり性急だから、ことしの冬ぐらいまで待つて、それでもだめならその時にやめろという事である。夜、田丸先生が来られた。先生の案は講座担任だけやめてもらったらいいだろうという事であった。そう願われればありがたい。

いかなる場合でもローマ字の事を忘れぬのが田丸先生のエライところである。

弥生やよいがどう思ったか、「おとうさんはことしじゅう、学校を休んで来年からいらっしやいね」と言った。だれかのいうのを聞いてだろう。

一月十六日 金 晴 朝は「蜜蜂みつばちの生活」を読みつづける。江口君えぐちが来た。子供がはいれきで大病院に

はいつているそうである。昼飯をくったらどういふものかたまらなく眠くなって、とうとう三時まででねてしまった。二階へ上がって絵の本を見て、それからローマ字で「すずめの顔」をかいた。

夜、雪子が床の中で絵本を見ていた。「キコリノコドモ」というのを「ヒトリノコドモ」の間違いだらうといった。弥生はしんに「赤い鳥」を読んでもらっていた。

.....

一月二十二日 木 晴 風寒し 昨夕、亀沢町の車庫が焼けた。」At dinner time Shin told Yukiko what ought not to be told.* 木下君が学校から電話をかけた来た。丸善が Monthly Notice of R. A. S.* と Quarterly Journal of Met. Soc.* のバックナンバーの代価の書き付けをもって来た。両者合わせて千円以上にな

る。自分が注文したかと聞いた(例の人をとがめるような口調で)、自分は覚えはないといって電話を切った。あまり変だからこちらからまた電話をかけて、それは請求書であるか見積書であるか、どっちだと聞いてみたら、見積もりというのでもない、ただ見せに來ただけだと答えた。

一月二十三日 金 晴 午後、藤沢先生が来て、本学年いっぱいには欠勤届もなにも出さなくて休んでよいように総長に話しておいたから、充分に養生するようにという事であった。自分はなるべく講座を免するなりまた休職にするなり、なんとか方法をしてもらいたい希望を述べておいた。円地、蒲地面君が来た。森戸問題の真相なるものを聞いた。学生中にはニヒリストの群れがいるそうである。森戸氏の年少客気に駆られた行動、この問題を利用して経済学部の見教授排斥、

こんなものが騒ぎを大きくしたのだ。

一月二十四日 土 曇 夜雨 寒いから寝ていた。
午前、ちよつと尼子さんへ注射に行く。午後、円地君が「経済学研究」にある森戸助教授の「クロボトキンの社会思想の研究」を見せに来てくれた。読んでみたが第一節からしてなんの事かわからぬ。ただひとり合点のようである。理論にも何にもなっていない。しかしクロボトの描き出した理想境はおもしろいものである。これに達し得られる可能性はのみ込めない。根本に仮定してある人間そのものが違っておりはしまいか。魚が鳥の世界の事を議論しているのではないか。」円地君は西郷隆盛が好きだそうである。

一月二十五日 日 晴 暖 朝、「ネチュアー」を
読んだ。日蝕観測の結果、アインシュタインの理論の

確かめられた事に関する記事が多い。アインシュタインが「タイムス」に出した文の中にある皮肉な文句が目についた。午後、二階で「イリュストラシオン」を読む。「カルコフにおけるコンミニュニストの施政」を読んだ。ボルシェヴィクの乱暴は一面から見ると数百年来虐待されたユダヤ人の復讐であるような気がする。そういう目で見ると彼らの行為はいくぶん *justified* される。」ローマ字の原稿を書いていたら木下君が来た。夜、「アンナカレニナ」を読む。ニコライの死に対するレヴィンとキチイの態度の差がおもしろい。

一月二十六日 月 晴 きのうと同じように朝は「ネチュアー」を読む。○○君、論文審査要旨を藤沢先生へ届ける。伊藤徳君と桑木さんに礼状をかく。円地君から返事が来た。

午後、暖かいから電車で銀座へ行って教文館のぞ